

信仰と実践

FAITH AND PRACTICE

<http://faith.reformed.jp>

2007年4月12日 第5号 第2版 編集・発行 関口 康

〒270-0021 千葉県松戸市小金原7-20-8 ysekiguchi@nifty.com

翻 訳

A. A. ファン・ルーラー

「ウルトラ改革派とリベラル派」¹

(連載第3回)

関口 康訳

2、キリスト小僧

しかし、われわれは、この「露骨である」か、それとも「隠れている」という、いくらか形式的な問題を扱うのは、もうこれくらいにしよう。もっと実質的な問題のほうに向きを変えていくことにしよう。これまで私がたしかに主張してきたことは、ウルトラ改革派の生い茂った草むらには、なんとひどい異端の毒蛇が隠れている、ということであった。ただ、この主張は、実証されるべきことでもある。

そこで私は、一人の老牧師がお話しくださったことから出発することにする。これは、われわれ夫婦がこの牧師夫妻宅を訪問したときに伺った話である。この先生は、オランダ改革派教会(Nederlands Hervormde Kerk)の改革派同盟(Gereformeerde Bond)の教会で働いておられた方である。当然われわれは、先生の仕事や教会のことに話題が及んだ。先生が教えてくださったのは、ひどく深刻なウルトラ教会員たちが先生のことを「このキリスト小僧」と呼ばわったという話である。それは、この先生が外的召命(vocatio externa)と称される純粋に改革派的な説教の構造を固く守ることを習慣としておられたことを指して言われたことであるという。この構造は証言(testimonium) 委任(mandatum) 約束(promissio)という見事な三要素から成

¹ A. A. van Ruler, *Ultra-gereformeerden en vrijzinnig* (1970), in: *Theologisch werk* (Th. W.), Deel 3, G. F. Callenbach N. V. ?Nijkerk, 1971, p.98-163.

り立っている。「証言」とは、御言葉の奉仕者が救いの証言を手渡すことを意味する。救いとは何であると彼が語り、そして、それは実際に起こることなのだと言語することである。それは、かつて一度、それを最後に、獲得され、贈られたものである。「委任」とは、この救いを信仰において受け取り、迎え入れるために、すべての人間は召されている、というのが神の御心なのだ、御言葉の奉仕者が語ることを意味する。そのとおり、すべての人は、彼らに神の御心を命じ、委任する人々から召されているだけではない。信仰の服従において神がお与えくださるすべてのものを自分自身のところまで届くようにし、自分自身が受け入れるのである。そのために、御霊が絶えず根気強く心の扉を叩くために立っておられるのである。眠れる王妃を起こすために、王子が城門の外で笛を吹くのである。外的召命 (vocatio externa) は、すべての壁を通り抜けて進入し、内的召命 (vocatio interna) になることを欲するのである。「約束」とは、全き救いとしての救いを信仰において受け取り、迎え入れた人々には、永遠の聖定に基づいて、彼らに与えられる永遠の祝福がまさに確かな現実として可能となるのだ、ということの意味するのである。

私は、この老教師はそのように純粋に改革派的な説教をなさったのだと、確信をもって言い張るつもりはない。しかし、いずれにせよ大体このあたりに着陸なさったのである。私にとっては、かの有名な〔ウィリアム・パーキンスの〕黄金の鎖²などは、この三要素よりも美しいものではない。われわれは一方の側にも他方の側にも傾いてはならない。われわれは説教壇から次のように語ってはならない。「皆さん、全き救いは十分に成就されました。それゆえ、わたしはあなたがたに宣言します。あなたがたすべての人は救われているのです。そのとき問題になっているのは、純粋にキリスト論的な事柄である。しかし、われわれは、次のようにも語ってはならない。「皆さん、全き救いは十分に成就されました。しかし、あなたがたは燃え上がってはなりません。なぜなら、救いとは、ただ選ばれた者たちのためだけに起こることだからです。ここで問題になっていることは純粋に聖霊論的な事柄である。しかし同時にこのきわめて一面的で貧弱なやり方には問題がある。上記の三要素は、両方の偏った立場に陥ることからわれわれを守ってくれる。キリスト論的な事柄が全面的に引き出される。それは、歴史的キリストの歴史のみわざにおける歴史的救いを指し示すのである。聖霊論

² 「〔ウィリアム・パーキンスの〕黄金の鎖」と訳出した原文 *schakels in het heilsproces* の直訳は「救いのプロセスの鎖の環」。heilsproces とは、ラテン語 *ordo salutis* の現代オランダ語訳。別訳としては「救済の秩序」など。パーキンスは、17世紀初頭のピューリタン神学者。「黄金の鎖」の具体的内容は、A. I. C. ヘロン編『ウェストミンスター信仰告白と今日の教会』(松谷好明訳、すぐ書房、1989年)の80ページと81ページ間の綴じ込み付録を参照。

的な事柄もまた、全面的に引き出される。それが、御霊が人間の心に働きかけてくださるための方法を命令し、約束するのである。問題は、わたしはこの方法を専有してもよいかという点や、わたしはそれを専有すべきかという点にあるのではない。問題は、主なる神が御言葉の奉仕者の口を通してわたしにお命じになることを、わたしが神の御心とすべきかという点にあるのである。

さて、大体このように老教師は説教なされたのである。ところが、深刻なウルトラ教会員たちは、人を哀れみ、小馬鹿にするような目で見くだした。彼らは地面につばを吐き、言った。「ちえ、またかよ、このキリスト小僧が」。しかし、われわれの牧師は、キリストとこの方にある救いに常に留まっておられたのである。先生は外なるものへと留まっておられたのである。われわれは、歴史的キリストとどのように関わっているのだろうか。われわれは、ベツレヘムでお生まれになり、ゴルゴタで死なれたお方とどのように関わっているのだろうか。歴史的キリストは、ともかくひとたび、内なるキリストにならなくてはならない。キリストは、われわれの心の中でお生まれにならなければならない。心の中で、このお方が死んでくださり、復活してくださらなければならない。それが、そしてそれだけが真の救いなのである。このこと自体については、もちろん、この表現やこれと同種の表現を、全く肯定的な意味で語ることができる。これらの表現は人格的で主体的な適用と、客観的なものをわたしのものにする(toeeigening)と、歴史的な救いとを指し示している。適用とわたしのものにする(toeeigening)は、歴史的キリストの受肉、十字架の贖い、復活と同じく、力強い出来事である。そこでも、同じようなことが起こるのである。全く同じというわけではない。われわれは、キリスト論的視点と聖霊論的視点との構造的で内容的な差異を過小評価してはならない。しかし、構造的によく似たことが起こるのである。

ところが、これらの表現に歴史的なキリストとこの方の歴史的なみわざとにおける歴史的な救いに対するなんらかの軽蔑が付随してくるや否や、純粋な正統主義の人は、考えうるかぎり最悪の異端の一派に陥っている。彼らが完全な深みに陥っているときには、内面的なキリストだけを語っているわけではない。内面的なキリストを語っているようで、いつの間にか、永遠のキリストを語っている。時間的要素がすっかり抜け落ちてしまうのである。その人は、永遠の聖定の中にいるようにだけ、自分自身を体験するのである。すべての時代の神秘思想において内面性は常に永遠性と婚姻関係にあった。しかしキリスト教と共にこの婚姻関係は解消された。歴史的要素は(理性的精神にとっては)大きな弱点であるが、キリスト教信仰の(歴史的意識にとっては)最高の栄光である。グノーシス主義は、そこでいつも躓くのである。グノーシス主義は常に極端なキリスト教であろうとしたが、まさにそのようなものとしてグノーシス主義は、それによってすべての時代のキリスト教信仰を最もひどく悩ましてきた敵である。グノーシス主義者は、歴史的なものを超克することを欲する。彼らは、使徒的

福音の權威に聴き従い、それに拠り頼むという単純な信仰を超克する、最高の正しい靈的認識を欲する。真理の裏側にある真理を知りたいと、彼らは欲するのである。

私は、ウルトラ改革派は明白なグノーシス主義であると語り、彼らこそが考えうるかぎり最悪の異端であると糾弾することについては何の躊躇もない。そのようなものとして彼らは、キリスト教界から身を引かざるをえなくなる。代々の公同教会の純粋な正統主義と彼らは、何の関係もない。救いを究極的に自分自身の外側に 歴史的 事物の中で栄光化されたキリストのうちに (少なくとも現時点で) 見出さない人は、もはやキリスト者ではないのである。キリスト者の背後に救いがある。キリスト者は、救いに基づいて生きている。救いのうちに生きているのであり、このわたしのうちに救いがあるのである。

これと比べれば、リベラル派の異端は、事実上、子どもの遊びである。彼らは常に全く欠陥だらけの貧弱な方法であるとはいえ 救いの中心としての史的イエスを指し示してきた。彼らが史的イエスのことを純粋な諸概念の教師であるとか、眞の生活知の教師であるとか、純粋な道徳的生活規範の教師であると見るのは、よいことである。彼らが仲保者としてのイエスと模範としてのイエスの間に常軌を逸した対比を設けた上で、史的イエスのことを単なる模範、あるいは特別な模範であると見るのは、よいことである。たとえ模範という語の意味が(われわれはこのお方に追従しなければならないという)純粋に基準的な意味であれ、(このお方から、われわれを救い出し、われわれを導いていただける力が生じるといふ)救済的な意味であれ、である。彼らは間違いなく、深刻な方法で使徒的福音を傷つけている。いずれにせよ彼らは、正当化も容認もできないような方法で新約聖書を矮小化している。しかし、それでも彼らは、イエスの御名を呼び続けている。キリスト教の事実上のすべてが、この点にかかっているのである。(次号に続く)

「ファン・ルーラー研究会」からのお知らせ

「ファン・ルーラー研究会」は、会員募集中です。ぜひご参加ください。詳しくは、ホームページ (<http://vanruler.protestant.jp>) を御覧ください。入会希望・意見・質問等は ysekiguchi@nifty.com (関口 康) までお寄せください。

「アジア・カルヴァン学会」からのお知らせ

「アジア・カルヴァン学会」は会員を募集中です。ぜひともご参加くださいますよう、お願いいたします。詳しくは、学会公式ホームページ (<http://society.protestant.jp>) を御覧ください。また入会希望・意見・質問等は Sno2999@aol.com (野村 信) までお寄せください。